PROLOGUE

――ファゴットさん、ファゴットさん！今日はいつもより大人しいですね？友達に「このオケのファゴットはめちゃめちゃ動くよ」って自慢しちゃったんだから。いつもみたいに、多動気味でお願いしますよ！

2004 年 4 月 18 日、とあるオーケストラの本番前のリハーサル。私が初めて山田和樹（ヤマカズ）さんとご一緒したときでした。毎回練習中に、ノリノリも良いところで、楽器をあっちにこっちに忙しくぐるぐる回しながら、シューマン交響曲 1 番「春」を吹いていた私たちファゴットパートに、ヤマカズさんはこのように指示されたのでした。正直なところ、私ともう一人のファゴットのおじさんは、リハーサル前に打ち合わせをしていました。曰く、「我々はいくらなんでもやりすぎだ、練習で遊びすぎた。本番はパリッと紳士的なファゴットでキメちゃおうじゃないか」と。実際にはクールという言葉とは無縁な二人でしたので、実現可能だったかどうかは別ですが、舞台では良い格好をしたいではないですか？！それをまさか指揮者に「もっと楽器を動かせ」ってビジュアル指導が入るとは思いませんでした。いよいよ本番。ファゴットも出来る限り目立って動いた覚えはありますが（笑）、ヤマカズパワー全開でオーケストラそのものが異様な熱気に包まれた演奏会となりました。私は未だにその時の細かいエピソードまで鮮明に覚えています。「ヤマカズ」初体験、この演奏会は忘れられないものになりました。

それはシューマンですか？と一瞬面食らう腰振りダンス、ヤマカズジャンプ、「シューマンから電話があったから、ここはカットね。ここはホルンだけじゃなくて、トロンボーンも入れちゃいましょう」等々の指示･･･（マーラーほど大胆ではなかったですが）。気取らず、にこにこしながら、過激な発言を本能的に飛ばすヤマカズさんの中に、ただの若さだけではない、誰の追随もゆるさない音楽への情熱や才能を見たのは、私だけではなかった筈です。本当にヤマカズはシューマンの「春」を踊っていました。シューマン独特の付点のわくわくするようなリズム、裁判までして勝ち取ったクララちゃんとの結婚。すっと日の光が差し込む台所で料理をするクララ。弟子のブラームスのような感情のうねりはないけれど、ゆっくりゆっくりとオーケストラの音量が上がり、雪解けの「春」を金管楽器が高らかに宣言するフィナーレ。いきいきとした 31 歳のシューマンがそこに居たのです。

いきいきとした 31 歳のシューマン？なんだか齟齬のように響きますね。私たちが「ロベルト・シューマン」という記号からすぐさま連想するものは何でしょう。歌曲の大家（「トロイメライ」の作曲者）、ロマンチストでしょうか？いやいや、精神病患者、妻クララのブラームスとの不倫疑惑、ライン川への入水自殺などの彼の悲劇的な側面が先にくるような気がします。実際、悲痛な心の病は彼の人生の相当部分を支配しており、彼は崩壊の一途を辿る精神を自覚しながら死に向かっており、その苦痛は想像を絶するものです。末っ子として生まれ、若年のころよりやや情緒不安定なほどに繊細かつ情熱的でありました。16 歳で彼の音楽への探求心の最大の理解者であった父親フリードリッヒ・シューマンを失い、18 歳になるまでには自己の精神の不安を日記に記しています。クララの父親フリードリッヒ・ヴィークに師事しピアニストを目指すも、21 歳前後で右手が使い物にならなくなり断念。23 歳の秋には重い神経衰弱の大発作に見舞われてしまいます。しかしながら、30 歳でクララと結婚してからは 1 年で 138 の歌曲を作り、翌年には交響曲第 1 番、第 4 番を書きました。ですから、交響曲第 1 番「春」は、クララによってもたされたひとときの心の平安によって書かれたわけです。

＊＊＊＊＊

さて、私たちの本日のメインディッシュである**シューマン交響曲 2 番**はというとどうでしょうか。33 歳でメンデルスゾーンが開校したライプツィヒ音楽院で教授として招かれ、翌年ロシアに夫婦で演奏旅行に出かけます。旅行の後に、精神障害の症状はさらなる悪化の一途を辿り、教授職を辞任、ドレスデンに移りワグナーやヒラーらと交際しますが、病状は回復せず。第 2 番交響

曲は、幻聴が激しくなって作曲の中断を余儀なくされた期間も含めて、35 歳の 12 月から 36 歳の 10 月にわたって作曲されました。作曲直前のメンデルスゾーン宛の手紙にはこうあります。

自分の内部に太鼓の鳴る音がして、それから何日間もラッパの鳴る C 音が聞こえる。自分ではどうしようもない。

第 1 楽章は、6/4 拍子の序奏で弦のなだらかな動きの上に、ラッパの C 音が付点付きの 5 度跳躍を示して始まります。このアダージョは暗鬱な空気に支配され、「自分ではどうしようもない」悲痛をファゴットが奏し、弦楽器・オーボエと渡って、すこし気分を盛り上げて 3/4 拍子の主部に入ります。私はこのアダージョほど綺麗でもの悲しいメロディーを知りません。なんだか夢の中で、大きな空気のようなものを一生懸命に追いかけて、ぐうで握った感触、とでも言えばいいのでしょうか。大切なものは、いつも目に見えないものなのです（星の王子様のきつね君みたいですが）。金管楽器の動機は全曲を統一するモティーフなのですが、5 度跳躍のどこにあんな寂しさがあるのか･･･。主部はシューマン本人曰く「闘争的気分がみなぎっているが同時に気まぐれで頑固」であって、若さの象徴、付点音符の連打となっています。付点音符で音階を上がったり下がったりしている時のシューマンは本当に楽しそうで、演奏している私たちもうきうきしてきます。けれども、このハイテンションのメロディーをいつまでもいつまでも続けていくときに、怖い夢にうなされないように必死なシューマンの心の闇に出会うような気がします。

第 2 楽章は、トリオを 2 つ持ったスケルツォです。バイオリンのめまぐるしい 16 分音符によって、ここでもわくわく感をいつまでも大事にしています。トリオは古典的なお楽しみトリオです。

第 3 楽章は、ロンド形式のアダージョ。こんな綺麗な楽章なのに、際だったソロがどの楽器にもないのは、もったいない！プレイヤーの視点からすると、そんな気分になっちゃう時があるほどです。けれども、これがシューマンのシューマンたる所以です。非常に繊細なメロディーの受け渡し、様々な楽器のブレンドされた音色の変化に耳を傾けてください。僅かに濃いピンクと僅かに薄いピンクの間をいったりきたりしています。日常の何でもない幸せ、これが丁寧に歌い込まれてゆくのです。何でもない幸せって、クララの入れてくれた一杯の紅茶かもしれません。

第 4 楽章は、本人の言によると、「終楽章になってはじめて、私は自分を取り戻したように感じ始めた」。メンデルスゾーンの交響曲第 4 番「イタリア」の冒頭との関連を指摘されることもある第 1 主題で、シューマンは自我の覚醒に入ります。第 3 楽章で気持ちよくうとうととお休みになられていたお客さまを覚醒させる効果もあるとかないとか。バイオリンのパッセージや、第 3 楽章の断片を経て、フルオーケストラで第 1 主題が復帰します。なんだか楽しくなってきました。なんて言っていると、だんだんと辺りは静かになり、短調の和音にしぼんでしまいます。ここから木管が新しい主題を示して、コーダとなります。この主題は第 1 楽章のラッパの動機と掛け合うように進み、大きな音楽となって、ティンパニの連打で輝かしいフィナーレを飾るのです。めでたしめでたし。

実際には、“めでたしめでたし”なんてことはなくて、40 歳で移住したデュッセルドルフの明るい風光で、若干精神は安定した（この時期に交響曲第 3 番「ライン」を作曲）ものの、梅毒に冒され、44 歳で投身自殺未遂、精神病院では面会謝絶のためクララに会うこともままならずに 46 歳でこの世を去りました。最後の言葉は”Ich weiß”（俺は知っている）であったそうです。当然「何を」という話になりますが、クララの不倫説を唱える向きが多い中、私は「何を」という目的語はこの言葉には永遠に要らないように思うのです。私たちがシューマンの病的な要素に触れながらも、かれの小さな幸せ、繊細な美しさに心うたれるかぎり。

＊＊＊＊＊

シューマンがいくら曲中で“めでたしめでたし”を叫んでいても、その人生は悲劇であり、そのことが私たちの様々な情に訴えてきます。物語は悲しいほどに、人の心に響くものです。皆さんは、悲劇と聞いて何を真っ先に思い浮かべますか？いやいや、ドーハの悲劇とかではなくって！そうです、悲恋物語ですよね。仲の悪い家の男女の叶わぬ恋を描いた「ロメオとジュリエット」

は、16 世紀末のシェイクスピアの悲劇ですが、シェイクスピア本人としてはちょっとした冗談・猥談を混ぜた卑俗的笑劇の要素が結構大きい、なんていうのですから、本当は悲劇の風上にも置けないのですが･･･（さらに余談ですが、「ジュリエット」という名前は私にはサド侯爵の物語に出てくる極悪非道淫乱売女の「ジュリエット」を連想させて、それだけで笑えてしまいます）。

O Romeo, Romeo! Wherefore art thou Romeo?

ああ、ロメオ、ロメオ、どうしてあなたはロメオなの？

という、あまりに有名な台詞は、いったい私たちの心を幾度打ってきたことでしょう。

この悲劇はチャイコフスキーの序曲をはじめ、音楽作品の題材としてもメジャーでありますが、バレエとして一番有名なのは、プロコフィエフの「ロメオとジュリエット」でしょう。全体で 52 曲 2 時間 30 分もある超大作なのですが、実はこのバレエ、当初は「ロメオが一分早く墓場に到着し、ジュリエットが生きているのを見つけた！」というハッピーエンドだったのです。これはソビエト当局の指導やバレエの振り付け上の問題だったのですが不評で、さらに「踊りに不向き」と酷評され初演が流れます。そこでプロコフィエフは終曲を悲劇的な結末に書き改め、バレエの初演に先行して組曲を 2 つ発表し、1938 年にはバレエの初演に漕ぎつけ、成功を収めます。このような事情で、現在では、組曲が 1-3 番、バレエ全曲版、ピアノ組曲という 5 つのバージョンが存在します。

それでは、本日演奏する組曲第 1・2 番からの抜粋について説明を加えましょう。括弧内はバレエ音楽における位置付けです。

組曲第 2 番 1.モンタギュー家とキャピュレット家(第 1 幕第 4 場、第 7 曲大公の宣言+第 14 曲騎士の踊り)

モンタギュー家はロメオの家で、キャピュレット家はジュリエットの家です。ソフトバンクの CM や「のだめカンタービレ」の挿入歌として有名な曲です。不協和音混じりのえげつない響きの後に、あの付点音符つきの奇妙な「騎士の踊り」が始まります。途中金管楽器の不気味な「反目の主題」を経て、フルートとビオラのグリッサンドによるジュリエットとパリスの踊りがとても魅力的です。

組曲第 2 番 2.少女ジュリエット(第 1 幕第 4 場、第 10 曲)

舞踏会前のジュリエットの揺れる気持ちを描きます。ヴァイオリンのきびきびした音型を木管楽器が受け、クラリネットやフルートが憧れに満ちた思いを歌い上げます。

組曲第 1 番 6.ロメオとジュリエット(第 1 幕第 5 場、第 19 曲バルコニーの情景)

舞踏会の後の有名なバルコニーのシーンです。O Romeo, Romeo! バレエではこの台詞が聞けないのが残念です。静かに二人が愛を語ります。ロメオはバイオリン、フルートはジュリエット。プロコフィエフはこんなところまで物語に忠実に書いています。その後、音楽は盛り上がり、コールアングレとチェロが「ジュリエットの愛の目覚めの主題」を演奏します。

組曲第 1 番 7.タイボルトの死(バレエ第 2 幕第 3 場、第 34 マーキュシオの死～第 35 ロメオはマーキュシオの死の報復を誓う)

親友マーキュシオを殺されたロメオが、タイボルトに決闘を申し込んで殺してしまいます。15 発の低音楽器の恐ろしい音響がくさびのように打ち込まれ、取り返しのつかない悲劇の発端の暗示となります。最後には、ロメオ達が逃げ出し、キャピュレット家の者たちがタイボルトを葬送し、町の太守にロメオの処罰を乞います。葬送行進曲が 3 拍子というのもなんだか面白い気がします。

組曲第 2 番 7.ジュリエットの墓の前のロメオ(第 4 幕エピローグ)

全曲の最後の幕の音楽で、悲劇的結末となっています。墓に駆けつけたロメオは、既になくなっているジュリエットを抱き上げ、自らの死を決意します。悲痛な主題の後、重々しく音楽は進み、最後は諦めを示す明るい和音で静かに幕を閉じるのです。

＊＊＊＊＊

ということで、今回のもう一人の主役がセルゲイ・プロコフィエフです。ロシアの片田舎に生

まれ、母親とピアノを中心として遊ぶ中で、幼少のころから作曲し、23 歳で優秀な成績で音楽院を卒業、数々のオペラ・交響曲から、交響的物語「ピーターと狼」、劇音楽や映画音楽にいたるまで幅広いジャンルの音楽を独自の作風で作曲した天才肌の人物です。どの作品にも見受けられる、新しさの中にある懐かしさ、奇妙さの中にあるかわいらしさは彼のユニークなキャラクターを表しています。シチェドリンという若い作曲家がプロコフィエフに質問をしました。「作曲の極意とは何ですか？」「如何に聴衆を驚かすかということだ」。26 歳で作曲した**プロコフィエフ交響曲第 1 番(古典交響曲)**はそんな彼のお茶目なウインクをそこかしこに感じることのできる、人気の高いピースとなっています。この曲は戦乱からの疎開先で初めてピアノを用いずに作り上げた曲で、相当の暇があったと見えて楽譜の細部にいたるまでプロコフィエフのこだわりが見えます。モダンな作風で有名だったプロコフィエフが「もしもハイドンが今も生きていたら作ったであろう」ような交響曲を書いたことで逆に周囲は驚いたようです。そういえば、ハイドンも人をびっくりさせるようなありとあらゆる交響曲を書いていますね。

第 1 楽章は古典ソナタ形式ながらに、提示部の繰り返しが省略されています。バイオリンのすとんと落ちるような 2 オクターブの跳躍メロディーとポケポケしたファゴットはとても印象的です。

第 2 楽章は綺麗な星空を見上げながら、管楽器のあくびが聞こえます。これはだんだんと滑稽な踊りを伴うのに、何故かすごく良い気持ちです。

第 3 楽章はメヌエットでも、スケルツォでもない、さらに古風なガボット。「ロメオとジュリエット」にも転用したという、プロコフィエフ本人もお気に入りの楽章。アドリブ色の強い楽しい音楽です。

第 4 楽章は･･･。ブレーキかけずに自転車で坂をくだっているような曲です。めまぐるしく景色は変化していきます。サドルにしがみついていないと大変なことになっちゃいそうです。

＊＊＊＊＊
EPILOGUE

ところで、「ヤマカズ」初体験となった件の演奏会ですが、これが忘れられない思い出となったのには、個人的な理由も存在します。素晴らしいシューマンを終えて楽屋に入ると、見知らぬ銀髪の感じの良いちょいワルおじさんがつかつかと私のほうに歩いてきたのです。「今日はとても楽しかったです、ありがとう、」彼は言いました、「それでは今度、これ、お願いします。」と、マーラー7 番の譜面を渡されました。これが、都民響という未だに得体のしれない組織との出会いだったのです。おじさんは、都民響ファゴットの超古株、石川純邦さんでした。その後私は都民響にお邪魔するようになり、団員の皆さんにご迷惑をかけながらも今日までなんとかやってきています。こんな訳で 2004 年 4 月 18 日の演奏会は、ヤマカズと都民響という 2 つの素敵な出会いをもたらしてくれたわけです。それから、3 年を経てヤマカズさんと都民響がこの東京文化会館でシューマンを演奏するというのは、何だかとてもわくわくして、言いようのない嬉しさを覚えているところなのです。

そういえば、山田和樹さんの師匠の小林研一郎さんは、チャイコフスキーの 5 番がレパートリーとして有名で、クラシックファンはよく「コバケンのチャイ 5」なんて言ったりしますが、私は「ヤマカズのシューマン」という言葉がそろそろ世の中に浸透してきていいんじゃないかなぁ、なんて思っています。「若き鬼才ヤマカズのシュー2」、じっくりお楽しみください。

（文責　ファゴットパート　冨士延章）